

オープンアクセスと日本 の学会誌の展開

特定非営利活動法人 ScholAgora

代表 永井 裕子

お考えいただきたいこと

- 日本の学術誌の特殊性
- S2O OAへと転換するTA ではないモデルを知る
- 学術情報流通に関わる皆さまは「OA」世界を望まれますか

目次

1. 日本の学会誌とはなにか
2. SPARC/Japan と UniBio Press (現 ScholAgora)
3. BioOneとの連携
4. S2O Openを購読する
5. 日本の学術誌とOA

1. 日本の学会誌とはなにか

日本の学術ジャーナル

- 「科学研究費補助金公開促進費学術定期刊行物」は我が国の学術誌出版支援の「科研費」として、昭和21年（1946）から、平成24年（2012）まで存在した。
- 科研費の採択基準の順守が、採択への第一歩
我が国の学術誌の在り方を規定してきたと言える。

戦後 紙が不足していた

- 主要な学会から、論文を出版する「紙」を入手するため
その費用を補助してほしいと文部省へ嘆願

→まさに、「紙媒体での印刷出版費用の補助金」
平成24年まで、そして今も？

日本の学術ジャーナル

2つのカテゴリー??

- 科研費採択誌 と 科研費非採択誌

その在り方とは??

平成24年度学術定期刊行物の 公募内容の変更点

- 当該刊行事業に係る、収入・支出を全て記載するよう計画調書を変更しました。
- 平成24年度応募時点で、刊行事業の収入額が支出額を上回る見込みの場合は、補助金を要求できません。
- 採択された後、交付申請時、実績報告時にも、当該刊行事業に係る収入・支出を全て記載していただきます。
- 実績報告において、刊行事業の収入額が支出額を上回る場合は、補助金の減額確定を行います。
- 計画調書、交付申請書、実績報告書に記載する会計期間は各学会等の会計期間を記載してください。

平成24年度科学研究費助成事業－科研費-研究成果公開促進費の「学術定期刊行物」及び「データベース」の公募に関する説明資料

収入（ジャーナル販売収入や購読料等）が支出（出版経費）を上回ってはいけない

海外学会の状況

Income for the Crustacean Society (US,2006)

Journal sales	\$24,000
Subscription	\$43,532
Membership fees	\$48,572
BioOne	\$17,680
Other	\$13,016

Jeffrey Shields. "The Journal of Crustacean Biology: Publishing a specialty journal". Presented at BioOne Publishers and Partners Meeting, April 7, 2007.

Income for the Zoological Society of Japan (2006)

Journal sales	\$500
Subscription	\$25,000
Membership fees	\$230,000
BioOne	\$20,000

Yuko Nagai. "UniBioPress". Presented BioOne Publishers and Partners Meeting, April 18, 2008.

日本の学術誌出版

- 図書館購読は進めてはいたが、科研費取得に力を注ぐ学会が多かった。しかも、支援は各分野の代表的な学会に向けられた傾向がみられる。
- 図書館へのアプローチが少なかったためか、国内英文誌は「和雑誌」に入っている場合もあったようだ。国内学会のジャーナルであるので和雑誌なのか??

日本の学術出版

次の学会活動のため、もしくは出版するジャーナルプロモーションのため、分野の振興のため、そして分野の次世代「教育」のための余剰を生み出せない状況が我が国では展開した。そして、その上で、科研費取得によるジャーナル出版が、学会の大きな目的となっていた学会もある。

国際情報発信強化へと名称を変更

*現在は、国際情報発信強化と名称を変更した。本来は、ジャーナルの知名度を上げる、論文発信の新たな手段の採用、ジャーナル広報,状況調査など多様な「ジャーナル発信強化」を狙ったものであったが、ジャーナル出版費用に現在も使われているのか？これは実態がわからない。

- 国内学会誌ジャーナル出版

戦後から現在まで国の支援がある

J-STAGEの出現（1999年）

- 国が支援する使用料無料のプラットフォーム
→日本の学術誌電子化促進において「最大の功績があった」といってよい。
- 投稿査読システム費用支援
- DOIデポジット料金支援
- Open Accessを20年前から提唱

日本の学術誌が持つ、別の問題

我が国の研究者は、国内学会ジャーナルより、インパクトのある海外ジャーナルへの投稿を好む傾向もある。

- ・ 研究評価の問題なのか？
- ・ そもそもより良い学術誌は海外にあるのか？

2. SPARC/Japan と UniBio Press

SPARC/Japan

国際学術情報流通基盤整備事業 第1期（平成15～17年度）

わが国の学会誌をとりまく状況をふまえて、**大学図書館等の協力を得つつ、日本の学協会等が刊行する電子化された英文論文誌の流通の促進**を図ることによって、学術情報流通の国際的基盤の改善に積極的に寄与すると同時に、わが国の科学技術・学術研究の成果の一層の普及を推進することを目的として活動した。

第1期では、以下の5項目を主要な目標として活動を展開した。

- (1) 事業参画選定誌の募集と活動支援
- (2) 編集工程の電子化支援
- (3) ビジネス・モデルの構築支援
- (4) 国際連携の推進
- (5) 調査・啓発活動

SPARC/Japan

国際学術情報流通基盤整備事業 第2期（平成18～20年度）

第2期の達成目標として次の3点を掲げて活動した。

- (1) ビジネスモデルの構築
- 大学図書館におけるサイトライセンス契約の推進をはじめ、従来の日本的な刊行から国際的な刊行へと移行を促し、パートナー誌の自立を図った。
- (2) 国際連携の推進
- 米国SPARCとのMOU締結を契機として、日本の学術雑誌の認知度を上げて、存在感を示すために、国際的にアピールしていくとともに、国際的な販路拡大のための支援を行った。
- (3) Advocacy活動の展開
- 学会誌担当者向け連続セミナーをはじめとした人材育成などにより、情報提供と情報共有の場を提供した。そのほか、ビジネスモデルの構築支援に関連して、図書館と学協会とのサイトライセンス契約締結の実現には、電子ジャーナルを利用する研究者の意識を高めることも必要であり、そのための広報・啓発活動も推進した。

SPARC/Japan

国際学術情報流通基盤整備事業 第3期（平成22～24年度）

第3期は次の4つの課題を解決するために活動した。

- (1) 高次の学術コミュニケーションを実現するための体制
- (2) オープンアクセスについての共通理解とビジネスモデル
- (3) 日本の学術誌の基礎的情報の把握
- (4) 国内学協会誌の発信力強化

具体的活動として次の4点に取り組んだ。

- (1) 日本版UKSG準備活動
- (2) Advocacy活動
- (3) 日本の学協会誌基礎情報整備活動
- (4) 電子ジャーナル出版活動の展開支援活動

2005年 UniBio Press 設立

SPARC/JAPAN支援

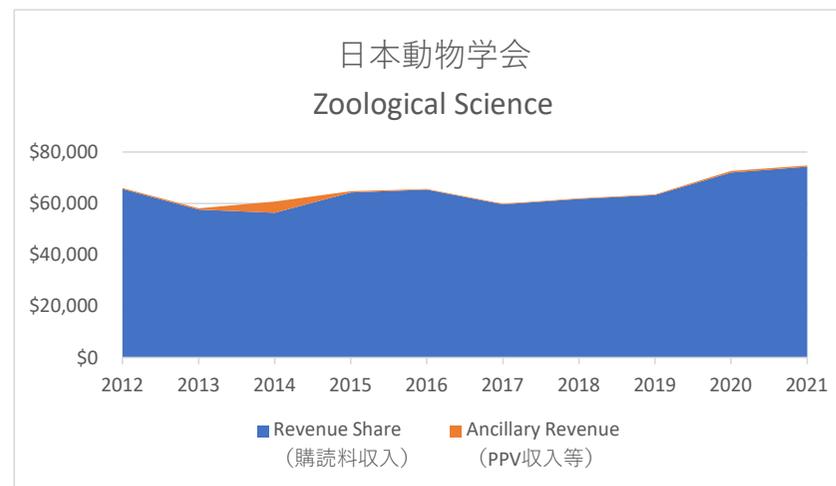
- 設立手続きに関わる費用
- BioOneとの契約に関わる費用（弁護士費用）
- XML データへの変換費用
- 2年間UniBio Press活動費用

UniBio Press(2005. 7. 20)



3. BioOneとの連携

	Revenue Share (購読料収入)	Ancillary Revenue (PPV収入等)	Total (合計)
2012	\$65,642	\$493	\$66,135
2013	\$57,651	\$583	\$58,234
2014	\$56,382	\$4,377	\$60,759
2015	\$64,367	\$396	\$64,763
2016	\$65,410	\$275	\$65,685
2017	\$59,659	\$260	\$59,919
2018	\$61,817	\$273	\$62,090
2019	\$63,297	\$326	\$63,623
2020	\$72,144	\$540	\$72,684
2021	\$74,344	\$502	\$74,846



Zoological Science 出版費を賄う

投稿システム費用

システム利用料

投稿管理者（アドミンと呼ばれる）費用

英文校閲 費用

出版費用 Wordから組版 校正 PDF作成
冊子印刷

UniBio Press 参加学会

年二回、もしくは四回の出版 ページ数が少ない
(BioOne購読料返還ではページ数が考慮される)

紙媒体発行数が多い (?)

出版の支援にはなっているが、出版費用を賄えてはいない (?)

UniBio Pressを立ち上げて

- BioOneプラットフォームからの出版
 - 電子ジャーナル出版による購読費返還を受ける
 - 海外図書館での「電子ジャーナルによる」購読の実現
 - 国内図書館での「電子ジャーナルによる」購読の実現

上記を踏まえて

古生物学会、哺乳類学会、鳥学会、爬虫両棲類学会にIFが付いた

4. Subscribe to Open (S20)

「Openを購読する」は持続可能なのか

BioOne Press Release 2023年12月4日

WASHINGTON D.C. – BioOne, the leading nonprofit aggregator in the biological, ecological, and environmental sciences, today announces a bold plan to offer up to 80 society titles as part of a Subscribe to Open (S2O) pilot beginning in January 2026.

This decision, unanimously endorsed by the BioOne Board of Directors, follows 18 months of careful feasibility analysis and extensive interviews with BioOne's community of society and library partners in search of an equitable and sustainable path to open.

ワシントンD.C. - 生物学、生態学、環境科学分野の非営利アグリゲーターとして業界をリードするBioOneは、本日、2026年1月よりSubscribe to Open (S2O) 試験的に最大80タイトルのソサエティタイトルを提供するという大胆な計画を発表した。この決定は、BioOne理事会の満場一致で承認されたものであり、18ヶ月に及ぶ慎重な実現可能性分析と、公平で持続可能なオープンへの道を模索するBioOneの学会および図書館パートナーのコミュニティとの広範な面談に基づくものである。

UniBio Pressからの質問

1. 慎重な実現可能性分析と広範なインタビューとは何ですか？
例えば、BioOneはアンケートを取ったのですか？彼らの意見の一部も教えてください。

2. できれば、アメリカの図書館員のS20についての意見を知りたい。

BioOneからの回答

○参加学会の25パーセントにインタビューを行い、その90パーセントから、この試験的事業に参加する可能性が高いと回答を得た。

○支援機関やコンソーシアムの多くと重要な話し合いを持ち、彼らはBioOneがSubscribe to Openへと移行することを強く支持した。例えば、BioOne最大のコンソーシアムの一つであるLYRASISは、BioOneの総収入の10%以上を占めており、私たちの決断を後押ししてくれた。マックス・プランク図書館は、この試みに非常に協力的で、すでに2026年の購読を約束してくれている。

BioOneからの回答

○ BioOneとその出版者にとっての最大のリスクポイントは、BioOneの支援ライブラリーがオープンアクセスへのアプローチをますます強く求めているため、このまま何もしないことであると判断した。

○ 欧米の図書館員は、APCベースの出版に代わる、公平で持続可能な選択肢と見なされるSubscribe to Openへの支持を強めている。また、BioOneのような組織が、参加者にオープンアクセスの道を提供しつつ、既存の販売体制と関係を維持しながら事業を継続することが望ましいことも認めている。

S2O Community of Practice

“Subscribe to Open” (S2O) is a pragmatic approach for converting subscription journals to open access—free and immediate online availability of research—without reliance on either article processing charges (APCs) or altruism.

「サブスクライブ・トゥ・オープン（S2O）とは、論文処理料（APC）や利他主義に依存することなく、購読ジャーナルをオープンアクセス化し、研究をオンラインで即時利用できるようにするための現実的なアプローチである。」

APCに依存しないOAモデル

- **Subscribe To Open (S2O)**

- 図書館が払っていた購読料を利用して、購読誌をOA誌に転換しようという試み

Annual Reviews等々

- 図書館共同出資モデル

- 図書館によるクラウドファンディング
- 図書館からの出資金によって学術書や学術誌をOA出版するモデル
Knowledge Unlatched、Direct to Open (MIT Press) 等々

- ダイヤモンドOAモデル

- 国、機関、学会等の補助金によりOA出版するモデル

UniBio Press理事会資料 「Subscribe To Open (S2O) オープンを購読する」尾城孝一 2023年5月23日

S20とは

Annual Reviews社が創出したOAジャーナル出版モデル

購読料をOAジャーナル出版のための費用に振り替える仕組み

購読料収入があるレベルに達すると見込まれる場合は、その年のジャーナルはOA出版となる

そうでない場合は、ジャーナルは制限アクセスのまま（購読機関のみがアクセス可能）

UniBio Press 理事会資料「Subscribe To Open (S20) オープンを購読する」尾城孝一 2023年5月23日

S20 良い点

- APC管理の煩わしさはない。APC管理は「多大なコスト」がかかる。
- 設定する購読料（閾値）に達せば、S20に参加するジャーナルはOA出版となる。
- 図書館は新たな資金の用意は不要。購読を継続すれば良い。
- 参加学会、ジャーナルには、ジャーナル出版費が今まで通り返還される。

S20 懸念される点（1）

図書館

「購読」を止める図書館が出るか。

S20に参加する学会、ジャーナル

さらなる「購読館の獲得は難しい」と想像できるため、
「購読料返還額が減少するかもしれない」

S20をビジネスモデルとして選択する組織（例えばBioOne）

極力値上げを避ける努力をすることになる。

S20 懸念される点（2）

- ・ Open Access時代 「より良く研究成果を発信する」ためさらなるシステム開発、XML作成、よりスピーディな公開、そのための費用を、例えばBioOneは生み出せるのか？
- ・ 参加学会への「購読料返還」は下がると思われる。

S20にふさわしいパッケージ、ジャーナルがある

- 非営利（2024年 SAGEが2誌をS20で出版）

- APCでのOAが難しいジャーナル

Where Did the Open Access Movement Go Wrong?: An Interview
with Richard Poynder

オープンアクセス運動はどこで間違ったのか？

- <https://scholarlykitchen.sspnet.org/2023/12/07/where-did-the-open-access-movement-go-wrong-an-interview-with-richard-poynder/>

OA運動の失敗の本質は何だったのか？

根本的な問題は、OA擁護者たちが自分たちの運動に主体性を持たなかったことだ。例えば、運動を組織化し、よりよく管理するための中心的な組織（OA財団のようなもの）を設立することができず、また、オープンアクセスの単一の正統的な定義を発表することができなかった。これは、オープンソース運動とは対照的であり、私が2006年に注意を喚起した欠落でもある。

あなたは（参加者の皆様）はOpen Accessを望んでいるのでしょうか。

- 学術情流通に関わる全ての人たちが、Open Accessを望むなら、たとえ、その過程が厳しくとも、その世界の実現のために努力をしなければならない？

5. 日本の学術誌とOA

日本学会協議協力学術団体学会ジャーナル調査（2023）

日本学会協議協力学術研究団体数

2,104 団体

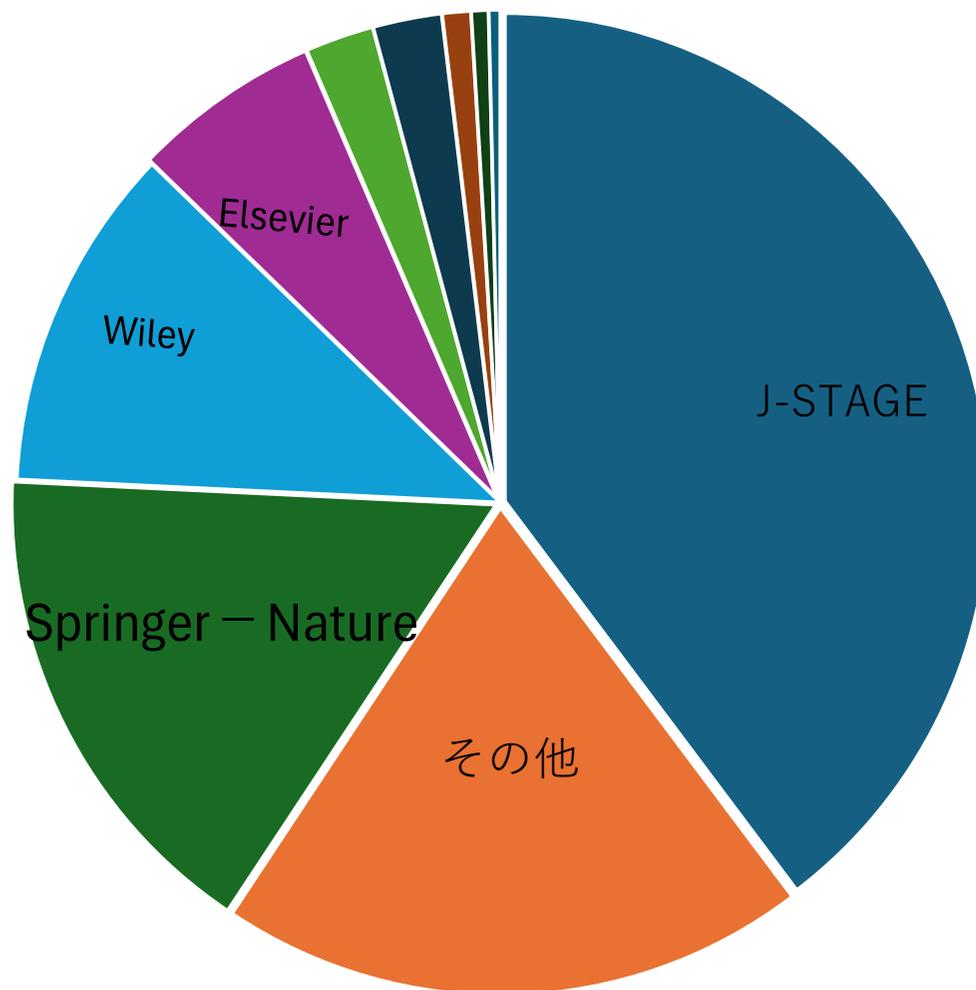
欧文誌、及び日本語と他言語混在誌の数

1,310 誌

内 欧文誌数

524 誌

日本学術会議協力団体出版ジャーナル出版サイト



■ J-STAGE ■ その他 ■ Springer-Nature ■ Wiley ■ Elsevier ■ Oxford ■ Taylor & Francis ■ BioOne ■ IOP ■ Project Euclid

・ 商業出版社、非営利団体ジャーナル (214誌/524誌)
OA状況

2024年9月

Open Access 誌 39誌

Hybrid誌 167誌

購読誌 8誌

J-STAGE 欧文誌、混在誌 OA状況

J-STAGEジャーナル699誌（欧文誌 212誌 混在誌
487誌）OA状況 2024年9月現在

OA 135 誌（欧文誌90誌）

フリー 515 誌（欧文誌119誌）

何らかの制限があるもの 49誌（欧文誌3誌）

J-STAGE OA誌 DOAJ 登録

OA誌 135誌 内 41誌 DOAJ登録

J-STAGEから公開される学術誌
Open Access時代への準備は順調である

ただし、J-STAGE利用OA誌の一部はDOAJへの登録が必要か？

大きな問題は、著作権ポリシーの決定

海外出版社（営利、非営利）サイトから公開される学術誌
Open Access時代に存在する

- Hybrid誌の動向
- APC
- S2Oの行方

UniBio PressからScholAgoraへ

日本学術会議科学者委員会学術誌問題検討委員会提言（2010）

包括コンソーシアムの創設（2010年）

https://jipsti.jst.go.jp/sti_updates/2010/08/2989.html

議論に関わった者として、UniBio Pressを新たな学術情報流通を支援する組織へと進化させることを決断した。

図書館総合展 11月6日（水）午後3時半 フォーラム開催

学術研究の発展にとって、多様性を包摂した、公平で持続的な学術コミュニケーションが重要な役割を果たします。そして、その主役が研究者であることは言を俟ちません。こうした健全な学術コミュニケーションを確立するためには、研究者自身は言うに及ばず、それを支援する学術研究機関、学協会、出版団体、政府機関、企業等の多様な関係者による協働が不可欠です。これらの関係者が所属母体の枠を越えて、平等な立場で一同に会し、互いの立場への理解を深めながら、現在のさまざまな課題を解決し、同時に将来のビジョンを描くために、UniBio Pressは、ScholAgora（スカラゴラ）に生まれ変わります。

<https://www.libraryfair.jp/forum/2024/1063>

永井 裕子

ありがとうございました。

nagai@unibiopress.org